

鴨長明『方丈記』より  
「元暦の大地震」

川村旭芳節付

ゆく河の流れは絶えずしてしかもその水にあらず  
淀みに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて  
久しくとゞまりたる例なし  
朝に死に夕に生るゝならひたゞ水の泡にぞ似たりける  
不知生れ死ぬる人何方より来たりて何方へか去る

時は元暦二年文月九日おびたゞしく大地震ふること侍りき  
そのさま世の常ならず

山は崩れて河を埋み海は傾きて陸地をひたせり  
土裂けて水涌き出で巖割れて谷にまろび入る

なぎさ漕ぐ船は波にたゞよひ  
道行く馬はあしの立ちどをまどはす

都のほとりには在々所々堂舎塔廟一つとして全からず  
或は崩れ或は倒れぬ

塵灰立ちのぼりて盛りなる煙の如し  
地の動き家の破るゝ音雷にことならず

家の内に居れば忽にひしげなんとす  
走り出づれば地割れ裂く

羽なければ空をも飛ぶべからず龍ならばや雲にも乗らむ  
恐れのかなに恐るべかりけるは

たゞ地震なりけりとこそ覚え侍りしか  
かくおびたゞしくふる事はしばしにて止みにしかども

その余波しばしば絶えず

世の常驚くほどの地震二三十度ふらぬ日はなし  
十日・廿日過ぎにしかばやうやう間遠になりて

或は四五度二三度若しは一日ませ二三日に一度など  
おほかたその余波三月ばかりや侍りけむ

すなはちは人みなあぢきなき事を述べて  
いきゝか心の濁りもうすらぐと見えしかど

月日かきなり年経にし後は  
言葉にかけて言ひ出づる人だになし

すべて世の中のありにくゝ我が身と栖との  
はかなくあだなるさままたかくのごとし

ゆく河の流れは絶えることがなく、  
なおその上に、もとの水と同じではない。  
流れが滞っているところに浮ぶ水の泡は、  
一方では消え、一方では生じて、  
人の世のならわしは、  
全く水の泡に似ていることである。  
私には分からない、生まれたり死んだり  
する人は、どこから来て、どこへ去って  
ゆくのか。

時は元暦二年（一一八五年）七月九日、  
ものすごく大地が揺れることが  
ありました。その様子は尋常ではない。  
山は崩れて河を埋め、  
海は傾いて陸地を水浸しにした。  
地面は裂けて水が湧き出し、  
岩は割れて谷に転がりこむ。  
海岸近くを漕いでいる船は波に漂い、  
道を行く馬は足の踏み場をまづかせる。  
都の郊外では、あちらでもこちらでも  
神社仏閣の建物が、一つとして完全な  
ものはない。あるものは崩れ、あるものは  
倒れてしまった。

塵や灰が立ちのぼって、盛んに上がる煙の  
ようである。  
地面が動き、家が破壊される音は、  
雷と異ならない。  
家の中に居れば、すぐに押しつぶされ  
そうになる。走り出れば、地面が割れ  
裂ける。  
羽がないので、空を飛ぶこともできない。  
龍であるなら、雲にも乗ろう。  
恐ろしいものの中で、とくに恐れなければ  
ならないのは、まったく地震なのだあと  
思われました。

このようにひどく揺れることは、  
しばらくして止んだけれども、  
その余震は、しばらくの間は絶えない。  
世間で一般的に驚く程度の地震が  
二、三十度揺れない日はない。  
十日、二十日が過ぎてしまつと、  
だんだん間隔があいて、あるいは一日に  
四、五度、二、三度、または一日おき、  
二、三日に一度など、だいたいその余震は  
三月ほどもありましたでしょうか。

当座は、人々はみな無益なことを言つて、  
いくらか心の穢れも薄らぐと思われたが、  
月日が重なり、年数が経った後は、  
言葉に出して言ひ出す人さえいない。  
だいたい、世の中が生きにくく、我が身と  
家とが頼りなく、かりそめなものである  
有様は、またこの通りである。